C—6　老年期（婦人）の衣服着用状況に関する一考察

1ートルダム清心女大　○高津信子　早勢小春

目的　最近、日本人の平均寿命は急激に延長し、現代の人間にとって、単に長生きするというだけでは意味がなく、健康で生甲斐のあるものであらねばならない。故に、老年期をいかに有意義に過ごすかが重要な課題となり、現在多方面からのアプローチがなされているが、それらの中に衣服に関するものをほとんど見い出すことができない。

そこで、衣服を取り上げ、一般に衣服に対する欲求が強いといわれている婦人に注目し、衣生活の実態を把握することにより、今後のあり方を考えたい。

方法　岡山県下の60才以上の婦人を対象とし、一般家庭有効数160名と老人ホーム67名を選出し、アンケート用紙配布と同時に聞き取り調査を行なった。また、老人の衣服について若年層がいかに考えているかの意識を知るため、150名を対象にアンケート調査を行なった。期間は昭和50年6月～7月。

結果　季節別着用状況については、洋服化の傾向を示しているにもかかわらず、冬には約70％の人が和服を着用しているという結果が得られ、依然として、和服と洋服の二重生活であり、和服への依存度が高い。洋服の色柄については、和服とほとんど差異が見られず、和服の色彩感覚が強く影響している。これらは、長い間の衣服習慣によるものと考えられるが、従来の老人は地味な色柄という観念の束縛から離れて、老人自身の衣服に対する意識の向上をはかることが必要であり、若年層においても老人の衣服に関心をよせ、経済的にも援助するなど協力の姿勢が望ましい。